

- 一三 () 名前負けしそうだ
ア 名前があまりに立派で
イ 有名人と横に並んだら
- 一四 完璧な ()
ア 勝利 イ 敗退
- 一五 耳障り ()
ア のよい音楽 イ な機械音
- 一六 () 片腹痛い
ア あいつのお世辞はみえみえで
イ あいつの冗談に大笑いさせられて
- 一七 春秋に富む ()
ア 元気な老人たち イ 塾の子どもたち
- 一八 行きつけの ()
ア お医者さん イ ケーキ屋さん
- 一九 暮れなずむ ()
ア 春の空 イ まで公園で遊ぶ
- 二〇 彼の強さときたら () 敵ではない
ア 彼など君の イ 君など彼の
ア いっきに勝負をきめてやろう
イ これ以上戦うのをやめてしまおう
- 二一 () 鳥肌が立つ
ア 感動のあまりに イ 恐怖のあまりに
- 二二 () 悲喜こもこもだった
ア 父の死の子どもの誕生が重なり
イ 合格発表は、喜ぶ人あり悲しむ人あり

しろくまの語句直前追い上げ講座 第五回 解答編

一 イ 「未練がのこって、思い切れない」が、「後ろ髪を引かれる」ということです。後ろ髪を引かれながら別れない、というのは変ですよね。

二 ア 「あいづち」は「相槌」と表記します。刀鍛冶が息を合わせて槌を打ち合うところからきている表現。

☆「打つ」のは「あいづち」 相槌を打つ

☆「入れる」のは「合いの手」 合いの手を入れる

三 イ これは入試でよく出されます！ 「気が置けない」は気を使う必要がない、遠慮がいらないうい、という意味。

☆「気が置けない」と「気を許せない」の混同に注意！

四 ア 「あげくのはて」に続くのは失敗です。いろいろやってみたが結局だめでしたあくという場合に使ってくださいね。

五 ア 「たわわ」は、実がたくさんついている枝がその重みでたれさがっている様子です。実がたくさんついていると思って「実がたわわになる」とついつい表現しちゃいますよね。「枝がたわわに実がついている」というわけです。

六 ア 徒然草の「神無月のころ」のくだりで、「柑子の木の、枝もたわわになりたるが」（みかんの木で、枝がたわわになっているヤツが）という表現でちゃんと出てきます。

たしかに「毛頭」には「少しも、わずかでも」という意味がありますが、

☆ 「毛頭ない」は「意図の有無を否定する」ときに使うと、おぼえておいてください。

七 ア 「あぜん」は「啞然」です。

☆「思いもよらない」+「あきれて言葉が出ない」

というときに使います。どちらの要素が欠けても「あぜん」は誤用になります。

八 イ そもそも「不測」とは予想ができないこと。予想ができないことを予測してどうすんねんっ というわけですよね。

九 ア 「あわや」は、もう少しでそうなるっ というときに使います。しかも「よくないことが起こりそう」な場合に使うのが本来の正しい使い方なのです。

一〇 イ 「差出がましい」は程度をこえてその人にかかわっていき、ということですよ。

☆ 「差し出がましいようですが」＋「相手の」行為・言動について
自分のことを後に続けてしまうと変になっちゃいます。

「差し出がましいようですが、わたしにやらせてください」

も、自分がすることで相手ににかかわっていいこうという意が含まれてイケそうですが、
むしろこの場合は

「厚かましいようですが」あるいは「差し支えがなければ」のほうがよいですよね。

一・一 イ

「人後に落ちない」は「他人にひけをとらない」という意味です。

一・二 ア

「名前負け」は「一つのモノについての名と実の落差」を意味します。名前が立派で実物
が見劣りする場合に使うので「無名な者」が「有名な」に負けるという意味ではない。

一・三 ア

「完璧」の「壁」をよく「壁」にする人いますよね。「玉」と「土」では大ちがい！「壁」
は宝石のことで、「完璧」は傷ひとつない宝石のことです。よい意味にしか使わないのです。
完璧な負けって… 変な使い方になっちゃいますよ。

一・四 イ

「耳障り」を「耳ざわり」とひらがなで表記していると「耳触り」かもしれないのでよい
意味にも使える、と最近の辞書には書かれています。でも、もともとは「障り」つまりじ
やまな、いやな、という意味になります。「肌ざわり」の「触り」と「耳障り」の「障り」
はまったく別のものと考えてくださいね。

一・五 ア

「片腹痛い」は、もともと平安後期から鎌倉時代の半ばまでは「かたはらいたし」つまり
「傍（かたわ）ら痛し」で、「はた目にも気の毒だ」という意味。「傍ら」が中世に庶民
が使い慣らしているうちに「片腹」という表記に転じたと考えられています。おかしすぎて
脇腹の筋肉がひきつっているのではありません。

ちなみに、最近、若者たちが「あの子はなかなかイタイ子だ」と「痛い」を使うようにな
っていますが、なんと古語としては正しい運用なのですよね。

一・六 イ

「春秋に富む」は、若くて将来性があり希望に満ちている、という意味。そりゃまあ、し
ろくまも、まだまだ若いもんには負けんぞっ と、言いたいところですし、高齢化社会の
中で、老人に将来性が無いとは言いませんが… ちよっとねえ…

一・七 イ

「いきつけ」というのは何度も通ってなじんでいる、という意味です。そりゃまあ、それ
こそお医者さんに毎日通っている人もたくさんいますが、「いきつけ」になっちゃ困ります。
ふつーは

☆ お医者さんの場合は「かかりつけ」を使いましょう！

「行き付けの医者」ではなく「掛かり付けの医者」のほうが適した使用です。

一・八 ア

これもついつい誤用してしまう言葉。「なずむ」って漢字で書けますか？
「泥む」

と、書きます。物事が進まず、滞る、という意味。

「暮れなずむ」は、暮れそうでなかなか暮れないことを言うのですよ。日がすっかり来てしまった、という意味ではありませんから注意してください。

一九 イ

「敵ではない」は、どうていかなわらない、という意味です。最初に「彼の強さときたら」で始まっているので、「彼のほうが君より強い」という使い方をした いわけで、「君は彼の敵ではない」と締めくくる必要があります。もちろん、ここでは「敵ではない」は「仲間だ、仲良し」という意味ではありません。

二〇 ア

これもよく入試で出題されます。「流れに棹さす」は「さらに勢いをつける」という意味。川下りで、船に乗っている、と、思ってください。そこに棹をさして、さらに前に進んでいく様子です。

夏目漱石の『草枕』に「情に棹させば流される」という意味も誤解しないようにしてください。

二一 イ

若い女子高生たちの会話を聞いていると（あ、そんな盗聴しているわけでも聞き耳立てているわけでもないですよ）電車や飲食店で耳にする若い女の子たちの話しているのが聞こえてくると、という意味ですからね）、はあ？ という意味？ という表現があって、けっこうおもしろいです。

「鳥肌モンだ」、という言葉が聞こえてきたことがあるのですが、どーやら、ちょく感動した、みたいに使っていますよね： 本来は、恐怖でぞっとしたとき、あるいは単純に寒いときに使うものです。辞書にも新しいものには「感動した場合にも最近を使う」と書いていますが、ほんとうは誤用です。

二二 ア

「悲喜こもごも」は、

☆ 「一人の人間が」喜びや悲しみを「交互」に感じること

なのです。時間的なもんだいで、あっちで喜び、こっちで悲しみ、という空間的同時並行的な心情の凹凸ではありませんから注意してください。テレビのアナウンサーも最近は誤用する場合がありますよね。